

talk! talk! talk! 歌舞伎俳優・市川染五郎さん



歌舞伎俳優

市川染五郎さん

九代目・松本幸四郎の長男として生まれ、歌舞伎俳優としての道を歩み続けてきた市川染五郎さん。活躍の場は歌舞伎だけにとどまらず、それ以外の舞台やテレビドラマなどでも才能を発揮し、多くのファンを魅了している。多忙な毎日を送る染五郎さんの清涼剤として活躍しているのが自身の写真集をきっかけに購入したというFM2だ。染五郎さんにとってカメラとは、そしてその面白さとは何か？ 今後のお仕事のことなども含め、幅広くお話を伺いました。

プロフィール

いちかわ・そめごろう。1973年、東京都生まれ。1979年、歌舞伎座で初舞台を踏み、1981年、七代目市川染五郎を襲名。以降、数々の舞台に出演しているほか、復活狂言から新作歌舞伎まで歌舞伎創作に精力的に携わっている。また1986年、史上最年少の14歳で『ハムレット』を主演し、その後『アマテウス』『ハイマイセルフ』『マトリョーシカ』などの歌舞伎以外の舞台やテレビドラマなどにも数多く出演し、多方面で活躍中だ。今後は12月5日から舞台『新・夢の仲蔵』（日生劇場）に出演、父・松本幸四郎とともに「江戸歌舞伎」のライバルを演じる。そして2003年1月2日から山本周五郎原作の舞台『さぶ』（新橋演舞場）に出演予定だ。

写真に興味を持ったのはモノクロの写真集がきっかけ 「それまでとは全く違う世界だと感じました」

染五郎さんが写真を始められたきっかけを教えてくださいませんか？

5年ほど前、初めての写真集を出したときに自分でも撮ってみたいと思ったのがきっかけです。それまでは写真……、とくにスナップ写真なんですけど、自分が写っていてもいなくても、なんだか生々しい感じがして見るのも嫌だったんです。ところが、その写真集は全てモノクロ写真だったものだから、それまで見ていたカラー写真とは全く違う世界だと感じて興味が湧いてきたんです。つまり、写真そのものではなく、カラー写真に抵抗があったんですね。でも、モノクロ写真はすごく新鮮で、面白いと感じました。この世界観が好きなんだと思います。だから僕はずっとモノクロフィルムで撮影しているんです。

それまではまったくカメラに触れる機会がなかったのですか？

小学生の頃は、機械をいじるという感覚が好きだったので、簡単な、小さなカメラで撮っていたことがありました。旅行に行ったときに撮影した写真を旅行記風にまとめて、「これは京都の五重塔です」とか書いて、家族に強制的に見せたりしていましたね（笑）。でもやっぱり、あまり写真は好きではなかったように思います。

現在お使いのカメラはFM2だと伺ったのですが。

はい。そのときの写真集を撮影して下さったカメラマンの方に、カメラをはじめたいんですけど何がいいですかと聞いたらFM2を勧められて、それで購入しました。

使い心地はいかがですか？

カメラの重さやシャッター音がいいですね。でもマニュアルカメラは初めてだったので、やはり撮影は難しかったです。たとえば、撮りたいものがあったり、ピントを合わせたりしているとシャッターを押すまでに時間がかかってしまってシャッターチャンス逃してしまいます。でもカメラはその手間のかかるところが面白さでもありますよね。決してそれがうまくなっても、自分の感覚で露出やピントを合わせられるというのがいいですね。

写真の撮り方を勉強されたりしたのですか？



いや、特にしていません。妹が先にカメラを始めていたので、ちょっと聞いたりはしますけどね。とにかくピントを合わせよう合わせようとしているだけで……。ピントは今でもあまり合いませんし、いまだに難しいままですね。FM2もまだ使いこなせていないです。

ではいろいろとカメラで失敗されたこともあるのでは？

フィルムが入っていなかったことがありましたね。枚数表示が42枚！ あれ？ってところで気がついて。42枚撮れるフィルムは入れていないはずだけどなあ、と思いながらそろそろとあけてみたら……って感じです（笑）。

「自分のために買ったカメラですから 自分が写っていないのはどうだろうと思って……」

本日は染五郎さんが撮影された写真を何枚かお持ちいただきました。



3匹のなかで一番のお気に入りだという愛犬“トト”。染五郎さんを見つめる愛くるしい目が印象的だ。



いつも遅れがちな“ロク”。「あえて後ろ姿のものを持ってきました」。背中に哀愁を感じさせる一枚。

はい。僕はよく実家にいる犬を撮影するんです。3匹いる犬のなかでもこの写真の“トト”はリーダー気取りなヤツで。要領が良く、怒られそうになるといつのまにか消えていたり、僕が実家から自宅に帰るときには、いつもこの犬だけが玄関まで来て見送りをしてくれたり……。まあ、かなりしたたかな性格の犬ですよ。3匹の中では一番の僕のお気に入りですね。

したたかでもお気に入りなんですな（笑）。

そうです、そういうところがいいんです。したたかっていうのも大事ですからね（笑）。後ろ姿の“ロク”は、3匹の中で何をするにもいつも遅いんですよ。さっきの犬とは逆に、逃げ遅れて怒られてしまう、そういうタイプですね。3匹ともそれぞれまったく違う性格なので面白いですよ。こんなにも犬って性格が違うんだと見ていて思います。

でも、犬などの動きのある被写体は、それこそピント合わせなどが難しいのでは？

いや、うちの犬は役者ですからね。いつも嫌っていうほど撮っているのに、ちゃんと止まってくれるんですよ。

犬のほかには普段どういったものを撮影されていますか？

人ですね。家族が居れば家族を撮ります。でも、そのうち僕のカメラにもいい加減つき合ってくれなくなるので、そうすると犬が居るので犬たちを……。

嫌というほど撮る、と（笑）。風景や物などは撮影されないのですか？

風景写真などは、自分で撮ってみて面白さを感じないんですね。うーん……、撮るときに計算が見えてしまいそうで難しいですよ。人物は、「こっち向いて」と言ってその人を撮るというのではなく、フレームの中にその人を入れ込んで撮影するというのが面白く感じられます。自然な感じに撮りたいんですね、きっと僕は。でも、家族の場合でも、カメラを向けるとやっぱり意識してしまうんじゃないですか。それが少しもどかしく感じますね。

染五郎さんはご家族だけでなく、ご自身もよく撮影されるそうですね。

はい。カメラを買ってからいろいろな人を撮影してみたいんですが、人のためにはなく自分のためにカメラを買ったわけですから、自分が写っていないのはどうだろう、それはなんだかしゃくだなと思いついて、それで時々自分を写すようになりました。どうやったら撮れるかなと鏡越しに撮影してみたり、わざわざ寝ている顔をしてシャッターを押してみたり、いろいろやってみています。



タイマーをセットし、急いでベットに横になってポーズを取った。「ちょっと自然に見えますね。狙い通りです（笑）」

これらの写真はそのようにして撮られたんですね。

そうです。この横になっている写真は京都のホテルで、何か書いている感じにポーズをとってセルフタイマーで撮影してみました。もう一枚も京都です。一昨年の秋に南座で「男鏡山」という出し物をやったのですが、その幕間に、ちょっと時間があいたので楽屋で鏡越しに撮りました。

これは染五郎さんならではのショットですね。舞台の時にこうしてカメラをお持ちになって撮影されているんですね。

時間的に余裕のあるお芝居の時には、楽屋にカメラを持って行って撮影しています。そういう時には自分を必ず撮ります。あとはそのお芝居に子役さんがいるときには、楽屋に乱入してきたりするので、そういう子を撮ったりもしますよ。



2000年京都・南座の楽屋で、幕間に撮影。鏡を通して楽屋の空気が伝わってくる。

カメラの面白みは『撮る』という行為そのもの 「カメラを持って歩いているときは、感覚が敏感になります」

今後カラーフィルムで撮影してみたいというお気持ちはありますか？

やっぱりモノクロが好きですし、今後もカラーでは撮らないと思います。モノクロの世界観であれば、ずっと後になって見たときに、あのとき撮っておいてよかったなと思えるような気がするんです。

染五郎さんは写真に多くの思い出を残していらっしゃるんですね。

確かに、この瞬間を残しておきたいという思いもありますが、逆に記録として残しておきたくない時というのもある。そういう時にはあえてカメラを持っていかないこともあります。

残しておきたくない時というのは？

すごく幸せだなあと感じたり、素敵だなあと思ったり、そういう瞬間というのは、そのときだけでいいじゃないかという思いがあるんです。それは自分の中だけに残しておけばいいと思うんですよ。

それに、記録にしっかり残っているとどうしてもそれに引きずられてしまったり、固執したりしてしまいますよね。そうすると次やるのが面白く感じなくなってしまうと思うんですよ。



ということは、写真を見返して思い出を振り返るということはあまりされないのでしょうか？

そうですね。撮った写真はただドサツと置いてあるだけで、アルバムにまとめて見返すことは今はないですね。祖父はそういうのが好きだったみたいで、撮った写真にコメントを付けてアルバムにしていましたね。焼き上がった瞬間はもちろん見ますよ。でもそれはただただ自分の中で、「ああ、あの時はこうだったんだな」って考えたり、「おお、これはいいんじゃないの」(笑)って思うだけの自己満足で、特に周りの人にも見せたりはしませんね。

では、染五郎さんは写真のどこに面白みを感じるのでしょうか？

撮る瞬間というか、撮るという行為そのものですね。カメラを持って歩いているときは、感覚が敏感になるんです。何かを撮影しようと思っているからカメラを持っていくわけで、そういう意識でいるからこそアツと思う瞬間が生まれ、手が動くのだと思います。逆に言うと、何かを感じようという意識でいられるから、僕はカメラを持ち歩いて写真を撮るのかなぁとも思いますね。

カメラによって感覚が研ぎすまされるという.....。

まあ、極端に言うてしまうとそうですね。普段あまりにもボーッとしているものですから、そういうのを鍛えるにもいいのかなと思います。でも撮れたものを見るとだいたいブレてしまっているんですけどね（笑）。

父も演じた山本周五郎作品の舞台『さぶ』に出演 「今回が決定版になればいいと思っています」

染五郎さんは歌舞伎だけでなく、それ以外の舞台やテレビドラマなど多方面でご活躍されていますよね。

そうですね。自分の可能性を試したいという思いがありますので、面白いと思うことや興味あることにはチャンスがあれば挑戦していきたいと考えています。

来年1月からは山本周五郎作品を舞台化した「さぶ」というお芝居が始まるそうですね。

はい。「さぶ」は人間同士の友情や絆の物語なのですが、日本独特の、日本人でないと理解できないような感情や感覚で描かれている芝居なんです。思ったことをストレートに言えなくてぎくしゃくしてしまったり、その一方で「あ・うん」の呼吸があったり、言葉以外の何かで相手に伝わるのがあったり.....。台詞にしても、言葉の行間だったり、語感とか余韻とか、そういったものが日本人の性格にとっても合っていると思います。沈黙や間が生きている、周五郎独特の世界観がとてもよく出ています。歌舞伎とは正反対の芝居ですよ。

正反対というと？

歌舞伎はお客様に向けてすべてを誇張して表現する芝居です。でも「さぶ」はお客様をまったく意識しない、リアルに演じる芝居だと思います。舞台を見るお客様は、僕たちを覗き見しているような、そんな感覚になるのではないのでしょうか。やっぱり芝居っていいなお客様に思ってもらえるような、そんな世界にしたいですね。

特にこのような方に見てもらいたいというのはありますか？

やはり日本人みんなに見てもらいたいです。あえて言うならば、若い世代の人に見てもらいたいですね。最近の時代の流れとして、すべてがビジネス感覚になってきていて、仕事はもちろんスポーツなども結果次第などところがあるじゃないですか。僕も古い人間ではありませんが、本来の日本人の気質というのは、結果だけでは割り切れない部分で作られてきたような気がするんですよ。

「さぶ」はそういった割り切れない部分が描かれているお芝居なのですね。

そうですね。今年「ヨイショの男」というドラマに出演したのですが、僕の演じた役は、誰かのために一肌脱いでやるという感覚が理解できないビジネスマンでした。情などでは仕事はできないと思っていて、実際そこではそれで成立しているんです。でも、仕事ができるできないというのと、誰かのために一肌脱げるかどうかというのは別なんです。『さぶ』は、人の情、絆、そういったものが本当に素敵に感じられる作品ですから、僕がやった役柄のような割り切ったバリバリ働いている人や、そういう感覚の若い人にこの芝居をどう受け取ってもらえるのか興味があります。

染五郎さん演じる“栄二”という役柄は、以前お父様の松本幸四郎さんも演じられたそうですね。

父の出演した「さぶ」が傑作と言われていますし、それを見た方も大勢いると思います。でもそれはそれとして、今回が決定版になればいいと思っています。僕自身がもともと原作の一読者として、とても感動した作品ですから、その気持ちが舞台の上で形になればいいですね。



『さぶ』（山本周五郎原作 / ジェームズ三木脚本・演出）
「どんなときでも人間は独りじゃない」
...身に覚えのない罪を着せられ、他人を素直に信じるのができなくなった栄二（市川染五郎）と、栄二を献身的に支え励ますさぶ（萩原聖人）、おすえ（寺島しのぶ）、おのぶ（雛形あきこ）の四人を軸に、人間の心と心の暖かいふれあいを描いた感動の舞台。

カメラは仕事以外で集中できること 「カメラを向けている瞬間がすごく気分転換になります」

今後、何かチャレンジされたいことなどはありますか？

脚本を書くところから、一から歌舞伎を作ってみたいですね。しかもそれが、斬新で新しいと感じてもらえるような芝居にできたらいいですね。

新しいと感じる歌舞伎ですか？

そうですね。歌舞伎って、“日本の伝統芸能”として学校の歴史の授業などで習ったりしますから、わかりにくい、固いという先入観があると思うんです。僕自身も、娯楽的な部分ではなく、“伝統芸能”としての価値だけで歌舞伎が残ってってしまうのではという危機感を常に感じていますし、それではいけないと思ってやってきました。もちろん伝統的な部分が一番の歌舞伎らしさだとは思っていますが、一方でやはり今の時代の人に、今の時代感覚で楽しんでもらえる歌舞伎というの必要だと思うんです。そういった意味で、新しいなと感じてもらえるようなものをつくり出していきたいというはずと考えていました。

なるほど。それについて何か具体的な構想はあるのですか？

たとえば現代アート的な、感性で作上げて、見る人も感覚的に受け取るような芝居ができればいいなと思います。でも音楽だったり、舞台のデザインや使われている手法などは日本の伝統的なものにこだわりたいです。日本の伝統を感じさせながら、かつ斬新で、いままでになく感じてもらえるようなものを作りだせたらいいですね。その実現のためにも、今は自分の知識を増やす努力をしていますし、舞台に出ることもひとつの経験になると思ってやっています。だから今後たくさん舞台に出演していきたいですね。

そして、その合間にカメラも続けていけると。

そうですね、まだまだ面白いものが撮れないので。

面白いと思うのはどのような写真なのですか？

以前、荒木経惟さんのニューヨークの写真集を見たときに「写真が脈を打っているな」というのを初めて感じました。ニューヨークの街の活気といいますか、街並も人もすごくエネルギーで、それが強烈に感じられたんです。とても刺激を受けたし、写真ってカッコイイなと思いましたね。

でも面白いんですよね。ただシャッターを押すだけのことなのに、撮る人によってできあがった写真がこんなにも違うというのは、自分でも撮れそうな気がするのですが、そういう写真はやっぱり撮れないんですね。本当に不思議です。

今後は、脈を打つような写真を撮ってみたいということですね。



りがとうございました。

そう、訴えかけてくるような、ね。歌舞伎をやっていますから、ポートレート写真はとても身近にありますし、僕自身もすごく好きなんです。言い訳ではありませんが、プロの方の撮影を見ているといろいろな機材がいるんですよ。機材にお金をかければかけるだけその分クオリティは上がると思うんです。でも僕にはそれができませんから、写真から訴えかける何かを感じてもらえるような、躍動感が感じられるようなものを撮れたらいいなと思います。

では最後に、染五郎さんにとって今カメラはどのような存在ですか？

趣味というほどまではいかないかもしれませんが、カメラは仕事以外で集中できることなんです。ほんの一瞬ですが、カメラを向けている瞬間がすごく気分転換になります。だから、これからはもっとカメラを持つ機会が増えるような気がします。

今後多方面でのご活躍を楽しみにしています。本日はお忙しい中、どうもあ

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.